

逐次刊行物

13.2.14

国立女性教育会館
女性教育情報センター

Hand in Hand

海を渡る鳥は、波間を漂う流木に憩うという。離婚——それは旅の半ばの一つの出来事。
新たな旅立ちをした女たちはいま手を取り合い、女であるがゆえの偏見と差別に向きあう。
ハンド・イン・ハンドは、生きやすい社会をめざし支えあう女たちの、流木である。

Vol.230

[いくつになっても前向き志向で]

●夏は本来好きな季節だったのですが、クーラーは私の大敵。夏でも力チツとしたパンツスーツで、それでも寒くて会議中にスカーフを首に巻き、膝掛けをするといった防寒スタイルです。外と内の温度差にもまいってしまいます。これはもしかして年のせい？ 体温調整機能が落ちているのでしょうか。

●7月末に恒例の夏合宿を行いました。子育て後の人生設計がテーマでしたが、からだを壊して仕事を辞めざるを得なかった人もいて、子育て後もとにかく健康第一だと思いました。でも、健康って年齢だけに左右されるものではありません。子どもの就職がなかなか決まらず、子どもとの葛藤が深まる、契約の仕事が更新されない、親の病気で介護が必要となる、アパートの立ち退きを要求される等々、人生って次から次へと思わぬことが起きます。人間ってそんなに強くないから、悩みが多いとからだが壊れてしまう。でもね、どうしてこんなに私にだけ悪いことが起きるのかしらと思うのも心なら、いろんなことが起きるのが人生と思い、ではどうするかと打開策を考えるのも「心」なんです。

●母子家庭の母の就労支援をライフワークの一つと思って人々を説得し、NPO法人あごらを立ち上げてもらいました

が、既得権益を持つ人の壁に阻まれ、仕事は思うように増えず、NPOはずっと赤字続きです。私自身、難しい仕事に人々を巻き込んでしまったのかしらと落ち込む時もありましたが、政治家なのに、母子家庭の就労支援もできないでいうと叱咤され続ける中、協力者の努力で、お母さんたちに常時、在宅で働いてもらえるような仕事を少しずつ発掘できています。その協力者の最有力の一人に事故がありました。プールの飛び込みで頭を打って頸椎骨折。複雑高度な手術が要求されるとかで心配です。

●その人は、私たちには決して言わないけれど、会社経営等で厳しい局面に立たされていたようです。たいてい事故が起きる時って大きな苦悩を抱えている時なんですよ。

●「出口無し」と思える状況でも、戦略を立て一つずつ問題解決していけば必ず将来は見えてきます。老後や子育て後の人生設計というよりは、どんな時も前を向いて、その時その時を切り開いていく——私はそういう気構えでいます。人生は常に前向きに考えなくちゃ。そのためにも体力は大切と、このところストレッチと筋力をつける運動に励んでいます。体力がないと心まで後向きになりますものね。

(円より子)



画と書：浅野照子

白鯊はんに
焼きたて
秋刀魚
ジュジュと
音とたてて
流れ出る

●Hand in Hand 第230号 【発行日】2006年9月1日

【発行人】ハンド・イン・ハンドの会(代表 円より子)：(株)現代家族問題研究所内

【編集人】向井通江 長島千春 藤岡郁子 【印刷】(株)ニシカワインフォメーションサービス

【連絡先】〒102-0082 千代田区一番町4-42-6F TEL:03-3261-1835 FAX:03-3261-1836

http://www.madoka-yoriko.jp/ http://www.gendai-kazoku.jp/ nojiri@kazoku-mondai.co.jp

●2006 夏合宿報告●

(2006年7月29日/座談会)

「子育て後の生き方について」

さん

元・東京のお世話係/会社員/1951年生まれ

さん

大阪のお世話係/会社員/1945年生まれ

円より子さん

会の代表/参議院議員/1947年生まれ



7月29日(土)
10:00~11:00 座談会「子育て後の生き方について」
円より子さん、山本清子さん、後藤みどりさん
12:00~13:00 夕食、入浴
19:00~21:00 懇親会(11棟一・143号室)
7月30日(日)
7:30~8:30 朝食
9:30~12:00 「子どもと親の関係について」
講師 後藤みどりさん
12:00 閉会

7月29日&30日、「ハンド・イン・ハンドの会」恒例の夏合宿を埼玉県嵐山町の国立女性教育会館で行いました。遅かった梅雨明けをやっと迎えて、夏の陽射しと緑あふれる環境のもと、約20名が旧交を温め、互いの悩みに耳を傾け、触発し合い、刺激を受けた2日間となりました。

近況報告から、ハンドの会の今後について、夜の懇親会でのストレッチ体操の即席実践講座(?)まで、紙面ではご紹介しきれないこともたくさん。この雰囲気を経験してみたい方は、来年はぜひ、ご参加ください。合宿2日目の、ケア・マネージャー加藤みどりさんによる「ベトー法」というハンガリーで生まれた療育システム(身体的な自立を援助する教育学)についての興味深いお話は、次号以降でご紹介します。お楽しみに。



●気になる「健康」と「子離れ」

円 自分では若いと思っていても、身体がだるくて疲れが抜けにくかったり、周り中が健康不安を抱えている年齢になりました。いまの私の個人的テーマは「健康」。振り返れば、子どもが小さい頃は入院なんてできませんから、胃潰瘍ですい臓まで穴があいているときだって一日も入院せずにやってきましたからね。

娘はいま24歳で、就職して自立しています。19歳のときにひとり暮らしを始めたんですが、それまで母子密着気味でしたから、「寂しくなるかな」と心配でした。でも、いまは「ひとりって、なんて快適なのかしら」と、いまさら誰かと暮らそうなんて気は起きませんね(笑)。メールはとても便利で、電話で話すと仲良くできないのに、「身体に気をつけて」なんて優しい言葉が届いたりして、けっこうよい関係が持てたりしています。やはり、人間関係というのは、特に思春期以降の子どもとは、くっつき過ぎはよくない、離れてほんとうによかったと実感しているんですよ。

仕事は、会社員、フリージャーナリストを経て、14年前に国会議員になっていま3期目ですが、6年の任期なので6年ごとに落選する可能性があるんです。国民や国家と契約している契約社員のようなもので、安定した職ではなく、退職金も雇用保険もないし、国保に国民年金。いま議員宿舎に住んでいますから、落ちたらすぐに住まいと職探しをしなくてはなりません。恵まれてはいるかもしれませんが、けっこう不安定な立場だといえますね。

●老後の「暮らし方」と「働き方」

11年前、娘が高校1年生になった頃、高校3年間と大学初年度の学費だけはなんとか確保して、私の身に何かあっても、あとは奨学金や私の保険金で大学を出るくらいまではなんとかなるだろうというメドがついたときに、初めて自分のことを考えようと、ハンドの会の延長線上に「ゆうとの会」の活動をはじめました。(東京での活動に連動するものでもありました) まだ離婚したてで子育てに必死なメンバーを「ジュニア」組としたら、子育てにある程度メドがついた「シニア」組ですね。「ゆうと」には、各自が好きな漢字をあてはめています。遊人、悠人、勇人、結人……。

もっぱら遊びでまとまっていて(笑)、母子家庭の共通項としては毎日が必死の真剣勝負の日々ですから、せめて1年に1度は上げ膳据え膳で1泊しようと、宿泊と

交通費で1万円の予算で合宿と称して出かけています。その合間に、勉強会と称して、グループホームの見学や体験入所をしたりして、老後の暮らし方を模索、検討中です。60歳を過ぎて定年退職しても、年金では暮らせない人がほとんどですから、働ける間は働きたい、でもなかなか職はないという現状から、アウトソーシングを引き受けられる会社を作ろうという話も出ています。いずれもまだ検討中で、特にグループホームを作ることに限っては、「いまのこんな気楽な暮らし、やめられへんな」となかなか前に進まない(笑)。でも、解決法のひとつに「時」があって、時間が解決してくれるかも。50歳の時には納得できなかったことが、60歳になったら受け入れられることがある。65歳になったら、もしかしたら、もうちょっと受け入れられる。それを期待して、まだ試行錯誤を続けています。

そんな中で、いま私たちの救いは、メンバーの中には55歳の人もいれば65歳の人もいること。子育てについても、老い方についても、モデルが目の前にいるんですよ。迷ったときに必ず、それを目標にできたり、話を聞けたりできる。なにより私が20年間、大阪ハンドの世話役としてやってこられたのは、そういう支え合いがあったからです。いわゆるマイノリティとして、不安や足りないものがいっぱいある不自由な生活の中で、パワーの源になっているのがハンドの活動だったと思う。その延長線上に「ゆうとの会」があるんです。いまは、具体的には報告できることはありませんが、来年の3月に四日市から大阪に引っ越してきて、大阪のメンバーと一緒にやっていきたいという人がいて、そのアウトプレイメントの引き受け手になろう、そこからまたちょっと真剣に考え始めよう、というところまではきています。

●もう一度「一緒に暮らす」という選択

私は、ハンドの会が発足した当時から、しばらくの間、東京の会のお世話係をしていました。円さんのところと娘が同じ歳で、娘たちが2歳位の頃からの付き合いですから、もう20年以上になりますね。

日本の離婚の特長として、男性はそうでもないけれど、女性の再婚率が圧倒的に低いんですよ。後家とホームレスは3日やったら辞められないといいますが(笑)、ひとりで暮らす気持ちは何ものにも替えがたく、わき見をする暇もないような生活の中で一生懸命、子どもを育ててきました。ハンドの仲間を見ていると、奥歯を噛みしめて一言もつらいとも悲しいとも言わずに頑張っていて……。娘が大学に入ったり、就職したりした

ときに、「よかったね」と喜びを分かち合えるのはハンドの仲間しかいませんでした。

でも、日々、花が咲いたとか、美味しいものを食べたときに顔を見合すことができる人がいれば……とも思ったんですね。苦しいときは、ひとりでもいい。でも楽しいときは、誰かと分かち合いたいじゃないですか。この歳になると、パーフェクトな男がこの世の中にもいないと思えないし(笑)、そんなに期待はしないものの、それなりに共通言語を持てる人にめぐり合えたら、もう1回、失敗してみるチャンスと思ってもいいんじゃないかな、と。

円 2回目はバージョンアップとも言えますよ(笑)。

やってみることを恐れる必要はない、と思います。一回失敗はしたけれど、離婚ってあの程度のことですもの。もう一回離婚するにしても、そんなに辛くないかもしれないでしょう？ 逆に、いいこともそれなりにあるかもしれません。社会構造上、男性にいろいろな特典があって、離婚して女ひとりになったときに、全部その特典からはずされて、体格的にも重いものを持つとか、機械をいじるとか、全部ひとりでやることを建前に生きてきたわけ。でも、たまたま運良くというか、9歳年下の男手ひとつで娘を育てている人と出会ったんです。

円 どこで知り合ったの？

一緒に会社で、10年ほど前から知っていました。7年前、私が癌になったときに、一切合財めんどろを見ながら一緒にしろよ、と言ってくれたんですね。でも、病気になったとたんにお母さんがどこかに持っていかれるのは子どもたちにとって一番つらいことだろうと思ったし、もし死ぬのだったら、死に水を取る優先権は子どもにあると思い、第二優先権の彼には待ってもらいました。ただ私が寝たきりになって意思決定権がなくなったら、彼には私にアクセスする権利が何もない。それは、あまりにも気の毒だと思って、昨年の春、正式に籍を入れました。

いまは、彼と彼の14歳になる娘と一緒に暮らしています。その娘に対しては、お母さんという立場には逆立ちしてもなれないから、一緒に暮らしていく大人として、してやれることを精一杯しようというスタンスです。毎日、刺激的な生活です(笑)。

円 なんだかんだ言っているけど、好きな人ができたら一緒になっちゃうのよね(笑)。そういう人とめぐりあえて、おめでと(拍手)。

ただ、精神的にとってもナイーブな人で、営業職をバリバリやっていたんですが会社の機構の中で鬱になって、生き方を模索していたんですね。一昨年の秋に



引きこもってしまったとき、「何がしたいの」と一緒に考えて……人に感謝される仕事をしたいというので、介護の仕事を勧め、ヘルパーなどの資格を取って、今年の4月から介護タクシーの仕事を始めました。

それまでは一切合財、私が生活費を引き受け、いまもほとんどを負担しています。でも、あと5年で私が定年を迎える頃までに、彼に頑張ってもらって、だんだん私は彼のサポートにまわる形にしようと相談しています。いまは、帰るコールを入れて帰ると、ご飯もお風呂も用意ができています。私は週末に定期清掃と、ストレス解消の料理をするだけ。あとは、日常の料理も家事も彼が担当してくれています。

●発想の転換で 未来の解決策を

私は仕事で、2007年問題、団塊の世代が大量退職を迎える時期に、その人たちをどうフォローアップするかというプログラムにここ数年間、関わっています。その中で感じたのですが、老後の生活について、年金が少なく生活できない、足りない分はどうしよう、仕事は見つかるだろうか、などと不確かな要因ばかりを並べ立てて考えても、不安ばかりが先に立って、解決策はどこからも見出せないんですね。では、どうしたらいいの。

たとえば生命保険。子どもが小さい間は、自分の死亡に対するリスクを回避するための保険だったのが、子育てが一段落したいまは、平均寿命まで生きるとして病気になったときの医療費をどうするかという生存リスクに対する保険になるわけです。そういう視点から、いま入っている保険も、保険料、保障額、保障期間など、見直さなくてはならないわけ。これに加えて、年金はいつからどのくらいもらえるか、などを全部整理するためのフォーマットを作って、ゆうとの会で配って、自分で勉強しようと言っています。

不安というのは、漠然としたところからやってくるも



のなんですね。離婚したときも、夫からもらっていた生活費と同額を稼ごうと思うと、とても稼げない、子どもを食わせていけないと不安に思いましたが、家計簿をつけて削れるものを削って整理して、具体的な数字を出してみたら、月に14万円あれば家賃を払ってなんとか暮らしていけるとわかり、不安は軽減しました。ですから、これから先も、いつ、どれだけのお金が必要で、また入ってくるのか、それと同時に最低どれだけが生きるために必要かというのを具体的な数字で出してみる、というのが、老後の不安をなくすためのひとつのヒントになるのではないかと思います。

円 仕事ということに関しては、これから時代は変わってくると思いますよ。どんどん高齢者が増えてきて、企業も、これからは若い子だけを相手にしていたら生き残れないことがわかってきています。コンビニも、退職後から上の世代への戦略を考え始めている。マクドナルドでは、いま80歳を越えた人も働いています。若い子が対応するよりは、年配でちょっと身体は利かなくても、心配りができたりする世代に、接客や企画をまかせた方がいい、そういう風にこれから絶対になってきます。だから、こちらも、いままでと同じ仕事を頑張ろうとしてもダメ。頭を切り替えて、50代、60代ならではの仕事、またはそういう世代の人を相手にする仕事を考えればいいんです。

グループホームにしても、ひとり一人の個室と共有スペースを兼ね備えていて、個人の自由を尊重でき、一緒に住む楽しさや利便性を共有できる、リーズナブルな費用の施設を私たち自身の手で作ればいい。元気なら、そこから外へ働きに行ってもいいし、料理が得意なら食事作りを、掃除が得意なら共有スペースのメンテナンスを担当して、応分の対価を考えればいい。

住宅公団（UR住宅）は、いまは血縁がない人同士でも入居可能になっています。建物も、いまはもう使わなくなった社員寮なんかを活用できますしね。

円 そう、頭の使いようです。いままでどおりの、バブ

ルのときに正社員だった人たちの発想では、私たちは食べていけない。ガラッと発想を転換させなくては。それを今後、考えていくのが、このハンドの会の役割のひとつだと思っています。そういう意味では、国も発想の転換をして、今後の政策を考えなくてはね。

●人とのつながりの中で 将来の暮らしの形を考える

円 ハンドの会の今後ということ言えば、いまはインターネットの普及などで簡単に情報が手に入ったり、ネットワークにたどり着けたりしますから、特に若い世代の会員は増えなくなっています。

でも、インターネットでは、こうして実際に参加して、同じような体験をした人たちと触れ合うほどの元気はもらえない。こういう場があって、いろんな人の話を聞き、また聞いてもらえることが必要だと思います。社会の中にいたら、離婚について、自分が思ったとおりのことを話したら袋叩きに会ったりするじゃないですか。ここでは、みんなが「そうそう」といって頷いてくれる。それだけで、合宿が終わって帰ると元気になる。インターネットでは、なかなかそこまでの暖かいつながりとか、共感は得られません。

円 この会を始めた25年近く前には、まだ、離婚はある種、人格欠損者がするものだという、ものすごい差別がありました。それに対して私が「ニコニコ離婚」「なんで離婚が悪いの?」と言ったので、とてもインパクトがあったけれど、いまはそういう意味でのスティグマはなくなっていますから……。

これから必要とされるのは、定年後や子育て後の人たちが、どう生きていけるかという視点でネットワークを組めるかどうか、これからの20～30年をどううまく生きるかを考える方向へ切り替えることだと思います。収入だって、ある程度のフローが入るように考えなくてはならないし、身体を酷使しない働き方や、生きがいも視野に入れなくては。

78歳までは健康年齢といわれていますからね。心と身体はほんとうに直結していますから、ストレスを溜めて悪いことしか考えなければ、必ず病気になります。お金なんかかけなくても、健康はいくらでも維持できますから、毎日の積み重ね、ちょっとしたことをクセや習慣にして身体の機能を維持し、日々の暮らしの中に、たくさん楽しみを見つけましょうよ。そして、右肩上がりの時代とは違う、歳をとったときの私たちの仕事の仕方、生きがいのあり方を仲間と一緒に探していきましょう。

同封の

母子家庭の厳しい現状を伝え、
「児童扶養手当の減額」を最小限にするために

『アンケート調査』＆『請願署名』にご協力下さい!!

2002年に母子寡婦福祉法が改正され、児童扶養手当の支給額の減額が2008年度から行われることになりました。受給5年後を経過したら児童扶養手当を5割まで減額するというものです。

厚生労働省は、5年毎に行っている「全国母子世帯等調査」を今年の11月～12月にかけて、前倒しする形で行い、その結果をもとに減額率を決めようとしています。離婚等、母子家庭になって平均5年位で収入が上がり、児童扶養手当から抜け自立できる人が多いからというのですが、本当に時間が経つと母子家庭の暮らしは楽になるのでしょうか。離別母子家庭の一人当たりの年収は61万円にしか過ぎず、国の就労支援策は実を上げているとは言えません。

そこで、みなさんをお願いします。

私の知人であり、今年の通常国会が開かれている2月に、国会議員に母子家庭の置かれている状況や就労支援の状況を訴えようと、母子家庭の当事者団体で院内集会を行った際、講師を務めて頂いた藤原千紗（岩手大学助教授）さんから、「母子世帯の生活の変化調査」の協力を依頼されました。厚生労働省の科学研究費補助金の助成を受け、行っていっちゃいます。

母子家庭になってから現在までの生活状況、就労状況、養育費の状況等、時間が経つに連れて良くなるのか、悪くなるのか、そのままなのか、について調べるものです。そして、調査の結果は政府を含め、関係者に広く配布し、母子家庭へのよりよい支援策を打ち出すための資料とされます。

政府へ、みなさまの厳しい状況をいち早く知らせる貴重な資料となりますので、ぜひ、ご協力をお願いします。

（円より子）

▼▼▼▼▼ 謝礼と送付方法 ▼▼▼▼▼

●アンケートに回答いただいた方には、500円の商品券が贈られます。同封した謝礼送付用の封筒に「送付先住所、氏名」を記入し、同じく同封の返信用封筒にアンケートの回答と同封の上、**9月20日(水)必着**で、ハンド事務局にお送り下さい。折り返し、贈呈いたします。

●同じく同封しました「児童扶養手当の減額を最小限にすることを求める請願」にも、ぜひご協力下さい。ご家族、知人、友人等、コピーをとって周りの多くの方々に署名をいただいて下さい。この請願も同封の返信用封筒に同封して、ハンド事務局へお送り下さい。少しでも多くのみなさまの声を、国会に届けたいと思います。

募集①

◆「子どもの気持ち」◆

お話を聞かせて下さる思春期以降のお子さんをご紹介下さい!

シングルマザーまたはシングルファーザーの家庭で育った子どもたちに、面接インタビュー形式、またはメールや電話で、お話を聞いています。

きちんと話し合ったことはないけれど、親の離婚を子どもはどう受け止めたのかしら…そんな、気になる子どもの気持ちを担当インタビューアがあなたに代わって聞かせていただき、誌面で紹介させていただきます。

匿名での紹介OK。謝礼(図書券2,000円)のご用意あり。「子どもの気持ち、もっと聞きたい」「親の気持ち、もっと伝えたい」。時々、紙面でご紹介していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

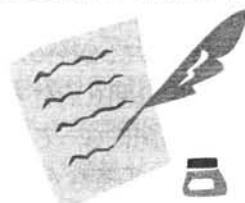
募集②

◆「家計簿公開」◆

誌面づくりにご協力ください

月々の簡単な収支と、いまの生活状況や悩んでいることなどをメモや文章にまとめてお寄せください。家計を見直してみることで、生活改善の糸口が見つかったりしますし、生活状況や離婚に至った経緯を振り返って自分の言葉で文章にしてみることで、これまでのモヤモヤが客観的に整理できたりもします。これまでのハンド誌面に掲載されている「家計簿公開」を参考にして、文章化にチャレンジしてみてください。謝礼(図書券2,000円)のご用意あり。

文章を書くのは苦手という方は、編集スタッフがお手伝いいたしますので、チャレンジしてみたい方、ご協力いただける方はご連絡下さい。



募集③

◆「私の人生、これからどうする？」◆

お手紙・手記を お寄せ下さい！

振り返ってみると、離婚直後は子どもとの生活を支えることで頭がいっぱい！ 自分自身の心の整理や生き方のことは後回しにして、ひたすら突っ走ってきた10年、20年、30年……ふと気づいたら、子どもは巣立って、そろそろ停年。さて、これからの私の人生、どうしようか。

- ◎家計は何で支えよう
- ◎まだ働ける場所、あるかしら
- ◎どこに住もう
- ◎継続中の恋の行方はどうしよう
- ◎生き生きと暮らしていくには何が必要？
- ◎今の生きがいはいはこれ
- ◎これから始めたいことがある
- ◎今さらかもしれないけれど別れた夫とのこと振り返って整理しておこうかしら
- ◎子どもがニートでなかなか自立してくれなくて困っている
- ◎老々介護が不安……
- ◎老後にシングル女性が共同で暮らす「家」づくりを企画

したい

◎いま考えているこんなこと、一緒にトライしてくれる仲間を募集中

……etc.

そんなあなたのこれからの人生に関するアレやコレやを事務局までお寄せ下さい。前向きなお話だけでなく、不安やグチなども遠慮なくどうぞ。ハンド紙面でご紹介して、みなさんと一緒に考えていきたいと思います。

記

●「手記」または「誰かに宛てた手紙(誰宛かを明記)」の形で。お話をお聞かせいただいて、編集部サイドで原稿化させていただく形も可能です。

●ハンド紙に掲載の際、実名かイニシャルかペンネームかを明記して下さい。

●10月中までをめぐりに事務局へ、郵送、FAX、メールでお寄せ下さい。



弁護士110番

夫婦関係が破綻している時、夫婦間の契約は取り消しを認めないのが判例



《回答者》
弁護士 段林和江
☎06-6364-1301 四

夫が定年を迎えるにあたり

Q リ、夫から離婚の話し合いがあり、私は家と夫の年金から半額受け取ることで了承。取り決めたことは私的な証書にし、夫と自分で1通ずつ持っています。夫は他県に中古マンションを購入し出て行って、1年10ヶ月経ちました。

別居後、夫は病気で入院したのですが、夫に「他人だから手術に立ち会わなくてもよい」と言われたので、息子は病院に行きましたが、私は行きませんでした。夫の母と妹が看病しました。夫の財産は母や妹にとの遺言書が書いてあります。夫の母からは、看病しなかったで、嫌味を言われました。

別居生活が何年かすると離婚が成立してしまうのでしょうか。夫は離婚については何も言っていないままです。また、離婚すると夫の年金半額は受け取れないのでしょうか。

A

まず、協議離婚は、離婚の届出をすることによって初めて成立しますので、別居生活を続けていても、自動的に離婚が成立するものではありません。仮に、別居のまま夫が亡くなった場合には、あなたには配偶者の法定相続権があります。夫が財産を母親や妹などに譲るという遺言をしていた場合、あなたの遺留分(通常の相続分の半分)は取り戻すことができますが、遺留分の侵害を知ってから1年以内に行使する必要があります。

夫婦間で作成した私的な証書の契約の本身は、離婚した場合の財産分与等として、夫があなたに家を譲渡し、将来の年金からその半分を払うというもののようです。夫婦間の契約は、民法754条により、いつでも取り消すことができますとされていますが、夫婦関係が破綻している時には取り消しを認めないのが判例です。ただし、協議離婚が前提ですので、離婚の意思をどちらか一方でも翻した場合には、財産的な約束の拘束力も無くなるものと考えます。

また、2007年4月1日から始まる年金分割制度は、結婚期間中に納めた分の厚生年金や共済年金の納付記録を離婚時に分割することによって、自分が年金を受け取る年齢になった時に直接受け取ることができるようになる制度ですが、あなたの契約はこれとは異なり、あなたが国から直接年金の半分を払ってもらえるわけではありませぬ。2007年4月1日より前に離婚したら、この年金分割制度の適用を受けることはできません。あなたが50歳以上であれば、分割によりもらえる年金見込み額を社会保険庁が通知してくれるサービスが、10月1日から始まるようです。

